

## 明石の史跡（91）芭蕉と明石



### 蛸壺やはかなき夢を夏の月

貞享5年（1688＝9月30日に元禄元年と改元）4月20日、明石に足を伸ばした芭蕉が詠んだ句であることは、周知のところである。その意は、「明けやすい夏の月が照る海中で、朝になれば引き上げられる身とも知らず、蛸は蛸壺の中に短いはかない夢を結んでいることであろう」との由（「笈の小文」『日本古典文学大系』46. 63頁）。

芭蕉は、明石からUターンして、その日は須磨に宿泊する（元禄元年4月25日付惣七宛書簡、同書363頁）。なぜ急いで明石を後にしたのだろうか。

芭蕉の各種の紀行文をひもとくに、彼の足跡は、関東・東北・北陸・東海・畿内に及んでいる。これらの地域は、幕府の勢力範囲なのである。明石（播磨）はまさにその西端に位置する。

関が原の戦いは、豊臣恩顧の大名を率いて、家康は勝利した。しかしながら秀忠指揮下の、三万八千の徳川譜代の大名たちは、合戦当日に遅れること4日を記録する。その結果、備前より西には、外様の雄藩が顔をそろえることになった。

芭蕉が、「おくのほそ道」の旅に出発した元禄2年は、春より災害が頻発していた。3月の4～6日にかけて、下総国銚子から常陸鹿島、さらに陸奥国仙台領沿岸を大風雨が襲う（治家記録）。同月23日には、会津藩は、財政悪化のために社倉米粃1万俵の流用が決定（家世記録）。27日に芭蕉は江戸を出立する。災害等のニュースは、江戸に届いているはずである。俳人以外の姿を想像してしまう。

現在の柿本神社に存在する上記の句碑は、旧姫路藩士松岡青蘿が、明和5年（1768）10月に建てたものである。ちなみにこの年は、芭蕉の没後七十五年忌に当たるという（兵庫県史4. 367頁）。



日本歴史学会会員 茨木 一成

芭蕉の蛸壺の句碑